

高齢ではあるが、それと思われた症例を経験したので報告する。症例は85歳女性。'96.2～多飲多尿あり、6月当院入院。水制限試験、ピトレッシン試験で尿崩症と診断されDDAPで治療された。前葉機能はLH/FSH分泌不全以外は正常。下垂体抗体陰性。MRIで後葉の高信号が消失し下垂体柄が腫大し蝶形骨洞に炎症性病変を認めた。神経学的検査は正常、腫瘍マーカーは $\beta 2$ -microglobulinが2.33 ng/mlと若干高値であった以外は正常。7ヶ月後のMRIでも下垂体柄の腫大が残存していたが、本年2月にはほぼ正常な太さになり、下垂体全体がやや縮小した。前葉機能は前回同様の所見であり、GHを含め保たれていた。本例はほぼ選択的に後葉が傷害されており一過性の下垂体柄の腫大が認められ良性の経過をとっていることからリンパ球性下垂体後葉炎と思われた。

7) 肺疾患に合併したSIADの浸透圧性バソプレッシン分泌動態の意義

鴨井 久司・江部 達夫
池澤 嘉弘・高木 正人 (長岡赤十字病院) 内科
佐々木英夫

8) 脳波異常を伴ったapathetic stormの一例

石川 真紀・山崎 雅俊 (厚生連村上総合病院) 内科

T3及びfree T4の異常高値を認め、apathetic stormを呈した症例である。apathetic storm発症時、脳波異常とFisher比の低下を認めた。

甲状腺機能亢進状態では筋肉及び肝臓における蛋白分解の増加により、BCAAの上昇が認められるとの報告がある。しかし、BCAAが低下するという報告はない。本症例では食思不振が認められ、血清アルブミンが低下したためBCAAが低下したと考えられる。

また、本症例は、前頭葉の徐波を中心とした高度な脳波異常を呈した。原因として、甲状腺ホルモンの上昇だけでなくアミノ酸の脳内でのバランスの異常も関与していると考えられたため、thyroid crisisに対する治療にBCAA Infusionを併用した。このことが、脳波の速やかな正常化に役立った可能性がある。

このように、食思不振を伴ったthyroid crisisに脳波異常認めるような症例においては、Fisher比を測定することが望ましいと考えられ、甲状腺機能以外にアミ

ノ酸バランスの補正も必要と考えられる。

9) 当科における糖尿病妊婦の実状

内分泌代謝班一同 (新潟大学第一内科)

10) 薬物性肺炎(L-asparaginase)後に糖尿病を発症した1例

田口 哲夫・中野 徳 (県立新発田病院) 小児科
浅見 恵子 (県立がんセンター) 小児科
佐藤 幸示 (同 内科)

L-asparaginaseによる肺炎の報告は多いが、検索し得た範囲で糖尿病を残したという報告は見いだせなかった。最近われわれは、白血病治療中に発生した肺炎に続いて長期間持続する糖尿病を呈している小児例を経験したので報告した。

8歳時に発症したT cell leukemiaの治療中に、L-asparaginaseによると思われる肺炎が発生、その5ヶ月後に糖尿病を発症。insulin分泌能は常に残存しておりType IIのDMであった。しかし、経口糖尿病剤でコントロール不可能でinsulin製剤の使用が必要であった。約3年間のinsulin療法の後、経口糖尿病剤を再度試み、3カ月経過した時点で経口剤でのコントロールが可能となっている。

11) 中途視覚障害者のリハビリテーション

—視覚障害者の調理・食事マナーの問題点—

山田 幸男・高澤 哲也
平沢 由平・大石 正夫 (信楽園病院)
清水 学 (全国バーチャット協会 会江南施設)
石川 充英 (東京都失明者更生館)
金沢 真理 (東京都盲人福祉協会)

【目的】視覚障害者の食事マナー・調理の検討を行った。【対象と方法】76名(男32名,女44名)の視覚障害者に面接して、食事・調理について調査した。【結果】目が不自由になってから、女性で食事を作らなくなった人は10名(30.3%),作っている人は29名(67.4%)であった。男性では作る人はわずか1名(3.1%)であった。食事・調理で最も困ることは材料の購入(73.0%)と調理(24.3%)で、食事マナーや後始末は比較的容